中国人日本語学習者の日本語複合動詞・複雑述語の V1＋V2 結合意識
―「～疲れる」「～慣れる」、「～てならない」「～てたまらない」を例に―

杉村泰（名古屋大学）

［要旨］

日本語学習者にとって複合動詞・複雑述語の V1 にいかなる動詞が来やすく、いかなる動詞が来にくいかという判断は必ずしも容易ではない。そこで本研究では日本語母語話者（以下「母語話者」）と中国語人日本語学習者（以下「学習者」）を対象に、アンケートによる○×の正誤判断テストを行うことにより、複合動詞「～疲れる」「～慣れる」および複雑述語「～てならない」「～てたまらない」の V1＋V2 結合に対する反応の違いを見る。その結果、①母語話者と学習者の持つ V1＋V2 結合意識の違いを明らかにするとともに、②学習者は母語である中国語の影響を受けて判断している可能性があることを指摘する。

「～疲れる」は主体が V1 で表される行為に疲労を感じることを表す表現である。V1 には主体の行為を表す動詞が来るが、「叩き疲れる」（母：許容度 50%、学：許容度 100%）、「聞き疲れる」（母：46%、学：84%）のようにずれの大きい場合がある。これに対応する中国語の表現は“打累”（中：80%）、“听累”（中：92%）であり、学習者は母語の影響を受けている可能性があると考えられる。また、日本語の「～疲れる」と中国語の“～累”は似た意味を表すが、V1 に他動性の高い動詞や身体的動きの小さい動詞を取る場合に許容度に差が出やすいことを指摘する。

「～慣れる」は主体が V1 で表される行為に慣れることを表す表現である。V1 には主体の行為を表す動詞が来るが、「立ち慣れる」（母：許容度 28%、学：許容度 62%）、「眠り慣れる」（母：16%、学：56%）のようにずれの大きい場合もある。これに対応する中国語の表現は“站惯”（中：76%）、“睡惯”（中：56%）であり、学習者は母語の影響を受けている可能性があると考えられる。また、日本語の「～慣れる」と中国語の“～惯”は似た意味を表すが、V1 に意志的自動詞を取る場合に許容度に差が出やすいことを指摘する。

「～てならない」と「～てたまらない」は前項に動詞や形容詞を取り、その程度が主体の感情を刺激するほど高いことを表す表現である。両者は似た意味を表すが、「～てならない」は「気がする」、「思われる」など感情の込み上げを表す表現と結合しやすく、「～てたまらない」は「暑い」、「痛い」、「喉が渇く」など感覚的な刺激を表す表現と結合しやすいという違いがある。これに対し、学習者は「～てならない」も「～てたまらない」も同じような表現として捉え、その違いをあまり理解していないことが分かる。ここで「～てならない」や「～てたまらない」に対応する中国語の“～得不得了”について調べてみると、学習者の「～てならない」や「～てたまらない」と中国語の“～得不得了”は前項に来る動詞や形容詞に似た傾向のあることが明らかとなった。このことから、学習者は母語である中国語の影響を受けて「～てならない」や「～てたまらない」の許容度を捉えている可能性のあることが分かる。